



画像所見のよみ方と鑑別診断 胆・膵 第2版

花田敬士, 植木敏晴, 潟沼朗生, 糸井隆夫
編著

●B5 頁400 2019年5月

定価: 本体 12,000 円 + 税

[ISBN978-4-260-03238-4] 医学書院刊

本書は初版に引き続き、日本消化器画像診断研究会を基盤として発刊された。日本消化器画像診断研究会は、1983年に有山襄先生、竹原靖明先生により創設された研究会で、各施設が持ち寄った貴重な1例を、発表時間5分、討論時間15分をかけて、消化器内科医、消化器外科医、放射線科医、病理医がけんけんごうごうの議論を戦わせる会である。CT、MRI、ERCP、EUSなどの画像と病理を突き合わせ、診断が正しいか否かのみではなく、その画像と病理像との整合性、診断に至るストラテジー、さらに治療方針の妥当性、遺伝子変異や病因論などに関しても延々と討論が行われ、時間オーバーすることが当たり前の研究会である。

私は以前より、本研究会は「画像オタク・病理オタクの晴れ舞台」と感じていた。質問者が自分でレーザーポインターを持って来て発表者にかみ付く学会・研究会など他にあらうか？ 発表者をそっちのけで質問者同士が議論することなどは、他の学会・研究会ではまず見たことがない。本研究会は、発表者に多くの緊張を強いるが、その反面、発表がうまくいくとホッとするとともに、さらに勉強しようという意欲が湧く、まさに若手にとって最高の鍛錬の場でもある。

本研究会の代表世話人は、初代の有山先生に始まり、堀口祐爾先生、山雄健次先生、そして現在の真口宏介先生に脈々と引き継がれているのである。第2版を執筆された、花田敬士先生、植木敏晴先生、潟沼朗生先生、糸井隆夫先生は、現在の日本消化器画像診断研究会の中心人物であり、また次世代を支えるホープでもある。

彼らによって初版本に引き続き、今回もまた、「画像オタク・病理オタクのバイブル」と言える素晴らしい本が完成したことに敬意を評したい。

小生は外科医であるので、実際に内視鏡をしたり診断を下したりすることは少ないが、常日頃から消化器内科医、放射線科医、病理医の診断に助けられていることを実感している。われわれは彼らの診断結果を受けて患者さんを手術したり、治療方法を変えたり、術後のフォローアップを行うのであり、画像診断・病理鑑別診断は、まさに患者さんの生死を分ける最重要事項であり、常に頭に入れておく必要がある。外科医にとって本研究会は、「画像オタク・病理オタク」の熱い討論とそれから導かれる多くの知見により外科臨床が助けられていることを、身をもって体感することができる場である。良い外科治療成績が得られるのも、良い内科医、放射線科医、病理医がいて初めて達成できるものであり、それは車の両輪のように両者が機能して初めて真つすぐに進んでいくものと思っている。

繰り返しになるが、本書は「画像オタク・病理オタクのバイブル」というべき極めて魅力的な本で、現在の「オタク」はもちろん、このようなオタク世界が広がっていることを若い医師にも紹介できる素晴らしい出来である。「オタク」は求道者でもある。「オタクのバイブル」である本書に刺激を受けて消化器画像診断の求道者が一人でも増えること、そしてその結果、多くの患者さんを救えるようになることを期待している。